

「泉山ヒュッテ」のこと

近藤春生

私の高校山岳部顧問としての長い道程の中で、私が津山高校に勤務してきた期間（昭和56年～63年）に、同校山岳部のもつ「泉山ヒュッテ」は、山岳部が維持、管理に当たってきたため、私は顧問として「泉山ヒュッテ」とのさまざまな係わりを持つ機会を得た。風雪に耐えた山小屋の長い歩みの中で、私の係わりは、ほんの一こまに過ぎないけれども、残された僅かな記録をもとに「泉山ヒュッテ」をめぐる物語を綴ってみたいと思う。

苫田郡奥津町と鏡野町の境に稜線をもつ「泉ヶ山」（北峰、1209.1m）の南峰（井水山または射水山、1167.6m）のすぐ近くに、年中、水の絶えることのない泉が湧いている。そこに「津山高校、泉山ヒュッテ」が建っている。昭和33年9月、当時の山岳部の生徒が「泉山の泉のそばに、ヒュッテを建てよう」という燃えるような情熱と執念が、ヒュッテ建設の最初の発端となった。当時、新校舎建築で取り壊されることになっていた建物の一部、約4坪分の廃材を泉山に移転し、山小屋として津山高校山岳部の訓練基地にしようというのである。解体作業、資材運搬、建築作業には、多くの困難な問題があったが、学校当局の積

極的な協力体制と援助のもとに、山岳部の生徒の夢は実現に向けて始動しはじめたのである。資材運搬は、鏡野町「中林ノ谷ルート」が使われたが、山岳部の呼びかけで集った男女合せて30名を越す協力生徒、鏡野町観光課や地元の大町青年団の全面的な協力によって、困難な荷上げ作業は克服されたのである。山小屋の完成は、同年11月3日であった。小屋の規模は、13.2㎡、10名収容の小さなヒュッテではあったが、県下の高校のもつ山小屋としては、唯一のものといってよかった。お粗末な山小屋ではあったが、建設に青春の情熱を賭けた彼等にとっては、歌の文句の通り、それは「黄金の御殿」であつたに違いない。

津山高校の山岳スキー部から登山部として脱皮し、高体連にも加盟、積極的に登山活動を開始したのは、泉山ヒュッテの建設が契機となった。その後、昭和35年秋、県下高校登山大会が泉山で開かれ、ヒュッテを見た他校の登山部員が、随分、羨しがったと聞いている。昭和38年夏には、ここで国体の県予選が行なわれている。泉山登山者に愛され親しまれて5年間、風雪と放牧牛の侵入で、かなり損傷したヒュッテの大修理が、昭和38年9月、

当時の登山部員で行なわれた。このときは、鏡野町「百谷ルート」から資材の荷上げが行なわれたが、またしても地元の方々の協力を戴いた。しかし、昭和46年、12年余りの風雪に耐えてきた、この山小屋も、遂に寿命尽きて倒壊したのである。

しかし、はやくも翌昭和47年、泉山ヒュッテ第二代目の全面的な再建計画の立案がなされ、津山高等学校長、津山山の会会長の名において、地元鏡野町、奥津町に対して、山小屋の建築協力要請の陳情が行なわれたのである。陳情書は次のように述べている。「泉山には、かねてより岡山県立津山高等学校の山小屋があり、本校のみでなく県下各高等学校山岳部および県下「山の会」の山岳センターとして親しまれ使用されて参りました。しかるところ、腐朽著しく使用に耐えず、倒壊のやむない状態に立ち至りました。しかし過去の経歴から、泉山より同小屋を失うことは寂寥の極みにたえず、あらためて岡山県高等学校泉山山岳センターとしての発足を思念いたしました。……」

昭和48年春には、前の陳情に対して、鏡野町、奥津町から財政措置の内示があったが、これを契機として、山小屋建設の具体化の諸手続きと作業が、着々と進展していった。建築は、院庄林業株式会社が当ることとなり、建築資材は、津山宮林署の特別の計らいで、改築予定地付近の国有林の立木払い下げによる現地調達とすることに決まった。敷地面積、約10坪に建てられる山小屋の建築構造は、丸木、掘立て、平屋造り、トタン葺きとし、中には、奥行き2m程度の棚を作ることにした。

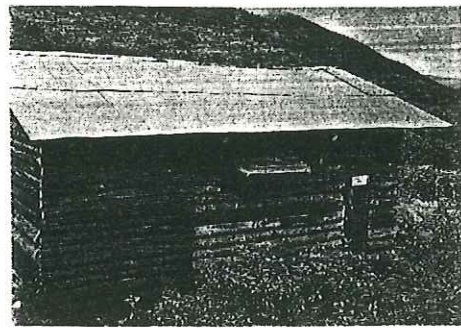
建物面積は、21.7㎡、約6坪で、収容人員15名～20名の、最初の小屋の約1.5倍のものが計画された。山小屋建設に当たって、5月末には現地調査が行なわれ、7月末には、桧、から松を主とする立木伐採が行なわれた。こうして、8月21日より建築工事が開始され、約1ヶ月後の昭和48年9月25日、再建工事は竣工、翌9月26日に引渡し式が行なわれ、「津山高校、泉山ヒュッテ」の看板が掲げられたのである。すでに述べたように、この山小屋は、地元鏡野町、奥津町、津山宮林署並びに院庄林業株式会社の格別の援助と奉仕により再建されたものであり、総工費約58万円は、鏡野町、奥津町、津山高等学校の財政負担において支出されたものである。

これまで述べてきたような「泉山ヒュッテ」建設の経緯によって、昭和33年以来、「泉山ヒュッテ」は、第二代の姿で今日に及んでいるが、その維持、管理は、津山高校の山岳部が当たって来ている。直接的には、山岳部が常時、小屋の状態を把握し、補修に当たって来てはいるが、それに伴う経費については、学校の援助を得てきたことはいままでのない。しかし、大がかりな修理の場合には、美作地区の高校山岳部員の生徒諸君や地元の方々の援助や協力を戴いてきていることも忘れてはならない。骨身おしまず、このような協力が得られてきた背景には、「私たちが利用する山小屋だから」とか「私たちが愛し親しんでいる泉山にある山小屋だから」という思いが、泉山を愛する皆さんの心の根底にあることを確信している。

山小屋が再建されて10年、特に屋根の損傷

が激しく、雨もりによる材木の傷みが進んできた。これ以上、放置できないと判断されたので、秋の深まりも極まった昭和58年11月末、大修理が行なわれた。この時は、屋根の全面葺替え、床板の補修、屋根の明り取りの取付けが、主なものであった。浪トタン、床板等の資材の荷上げは人力による外なく、津山高校の呼びかけで、津山工業高校、勝間田高校、津山高校を中心とする美作地区高校山岳部員の協力を得て行なわれた。運搬は「大神宮原ルート」に依ったが、山岳部員、顧問の総勢30名の他、この山小屋修理を記事にするため、山陽新聞記者も同行した修理工事であった。さらに昭和61年10月末、傷みの激しかった柱、梁、各1本、北面側壁の一部の取替え工事が、奥津町、「小林木材」の小林徳祐氏の好意によって、全くの奉仕で行なわれたことは、氏が朝夕、目前に見る泉山を愛するが故のことではなかったかと拝察する。

昭和59年の国土調査のため、町境である稜線の刈り払いが契機となって、奥津町企画観光課によって、^{また}昭和60年より、泉山登山コースの整備がなされてきており、それ以来、毎年、「泉嶺神社・福ヶ岨コース」、「泉嶺神社・よぼし岩コース」、「大神宮原コース」の三コースについては、分岐点の導標設置と刈り払いが行なわれてきた。これと並行して、津山高校山岳部も、知られている全てのルートに多くの導標を取り付け、泉山登山者の安全で快適な山行を願ってきたのである。泉山ヒュッテには、登山の感想を自由に書くためのノートが用意されているが、この記録を見ると、奥津町企画観光課の泉山登山に対



泉山ヒュッテ

する精力的な努力が始まって以来、この山を訪れる登山者が激増していることが、うかがわれる。遠く京阪神から、この山を訪れる人々、昔日のこの山への思い出をこめて、再び訪れる人々、さまざまなこの山への思いが、このノートには綴られているのである。以上に述べたように、近年、各方面の多くの関係者から関心が寄せられ、登山条件が整備・充実した、この泉山において、昭和62年10月末、第27回中国高等学校登山大会が開催されたことも、この山にとっての記念碑になることであろう。

泉ヶ山は、美作地方の極めて広い範囲から望まれる秀麗な独立峰である。冬の訪れとともに、最初に白銀に輝いて、その存在を示す山である。山高さが故に名山ではない、との言葉がある。泉山は、その逆の故にこそ名山なのであろう。この山にヒュッテがあることは、この山への登山者にとって、心の依りどころであろう。さらに登山道が整備され、導標が設置されていることは、この山への山行をより豊かにしていることと確信している。私は、「泉山ヒュッテ」の設立の契機となっ

た「泉山の泉のそばに、ヒュッテを建てよう」という津山高校山岳部生徒の今から30年前の単純な動機ではあるが、純粋でひたむきな燃えるような情熱と執念が、今日の「泉山ヒュッテ」に息づいているように思うのである。
(林野高校)

元山岳部顧問 寄稿
近藤春生先生の文より抜粋